

Title	The opposite is true の解釈に関する一考察
Author(s)	黒川, 尚彦
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 39 P.61-P.75
Issue Date	2005-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4384
DOI	
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

The opposite is true の解釈に関する一考察

黒川尚彦

1. はじめに

一般に *the opposite is true* は、ある内容に対して反対の内容が当てはまることを表す。だが、例えば、(1)は(2)に示す通り2通りの解釈が可能である。

(1) Tom loves Mary; I believe *the opposite is true*.

(2) a. I believe Tom doesn't love Mary.

b. I believe Mary loves Tom.

「愛している」の反対である「愛していない」という(2a)の解釈と、愛情の方向がトムからメアリーの反対である「メアリーがトムを愛している」という(2b)の解釈が可能である。どちらの解釈も先行節の内容に対して「反対」の内容を表している。問題は、反対の内容がそれぞれどのように理解され、またどのようにどちらか一方に決定されるかという点にある。

本稿では、*opposite* の意味を提示し、*the opposite is true* という表現から導かれる可能な解釈のパターンを示し、この言語表現が実際にどのように解釈されるかを明らかにする。

本稿の構成は次の通りである。次節で *the opposite is true* の振る舞いを観察し、統語的・意味的特徴を綿密に記述する。3節では *opposite* の意味論について関連性理論の立場から考える。*opposite* のコード化された意味

が OPPOSITE (x) という言語的に要求するスロットを持つ不完全な概念であり、これが関数として働くことを提案し、その妥当性を示す。4節では、opposite の語用論について考察する。the opposite is true がどのように解釈されるのか、特に opposite の概念的な不完全さがどのようにして語用論的に解決されるのかに関して関連性理論的分析を行う。

2. The opposite is true の統語的・意味的特徴

2.1 統語的特徴

The opposite is true という表現には次のようないくつかの興味深い統語的特徴がある。これらの特徴はすべてこの表現が節 (文) であることに起因する。第1に、the opposite is true は等位接続詞で接続されるとき、共起するのは、(3)にあるように、通常 but であり、and はほとんどない。

- (3) Poor response was more likely to be associated with a low TmP; good response with the presence of bone metastases, but *the opposite was not true* for poor response.

第2の特徴として、the opposite is true は、(4)にあるように、対比・譲歩を表す従属接続詞で接続され、従属節内にも主節内にも生起する。どちらの場合も、ふつう反対の理解の基となる要素が同一文中に含まれる。

- (4) a. Although the new burgesses then exceeded the re-elected ones, by the first parliament of Edward II's reign, at Michaelmas 1307, the opposite was true.
 b. Small mammals tend to have rapid heartbeats, while for large mammals *the opposite is true*.

3つ目の特徴として、the opposite is true は、(5)に示す通り、補部へ

の埋め込みが可能である。

- (5) Tom believes that our physical condition has a great influence on our minds; I believe that *the opposite is true*.

最後に、*the opposite is true* は、前置詞句など修飾句を伴うことが多い。この表現は修飾句に依存していると言え、その修飾句は先行命題のある要素とコントラストをなす。ただし、ここで言うコントラストとは、発話内のある2つの要素の間の対比関係を示すだけで、「反対」関係を必ずしも含む訳ではない。

- (6) Small mammals tend to have rapid heartbeats, while **for large mammals** *the opposite is true*. (= (4b))
- (7) In some cultures, initial refusal of an offer may be merely polite; **in others** *the opposite may be true*.
- (8) I expected to enjoy living in the country, but *the opposite is true*.

(6)では前置詞句 *for large mammals* と先行命題内の *small mammals* が、(7)では、前置詞句 *in others* と先行命題内の *in some cultures* がコントラストをなす。(8)は修飾句を伴っていないが、先行節との時制の相違によって過去における期待と現実とのコントラストが示される。

これまでの観察は以下のようにまとめられる。

Table 1: Syntactic characteristics of *the opposite is true*

	(i) coordination (conjunctions)	(ii) subordination (conjunctions)	(iii) embedding	(iv) dependency (on some contrastive element)
<i>the opposite is true</i>	+	+	+	+
	(<i>but</i>)	(<i>although, while, etc.</i>)		

2.2 意味的特徴

本節では、the opposite is true の統語的特徴と意味的特徴との間に相関関係があることを示す。この表現の意味的特徴はコントラストがある点である。では、前節で挙げた4つの特徴を順に見ていくことにする。

まず、共起する接続詞に関して、the opposite is true が対比・譲歩の意味を表す等位・従属接続詞と共起することを見た。対比・譲歩は2つの命題の非対称的な関係を示す。この関係にはコントラストが含まれている。

補部への埋め込みもコントラストを生成する。補部で表される内容は主節動詞の主語に関する事態を記述したものと見える。例えば(5)で補部の内容は主節動詞 believe の主語 I (の信念) に関する記述である。これに対し、反対の理解の基となる節はトムの信念に関する記述である。(5)ではトムの信念と話し手の信念の間のコントラストが示されている。

最後に、修飾句への依存という特徴もコントラストの生成に大きく影響する。例えば(6)の for large mammals は反対の理解の基となる命題内の small mammals と、(7)の in others は先行命題内の in some cultures とコントラストをなす。(8)は修飾句を伴っていないが、先行節との時制の差異がコントラストを産み出している。

次節では、(the) opposite の意味とその解釈に関する議論を行う。

3. (the) opposite の意味論

本節では「反対」という概念について議論を行う。構成は以下の通りである。3.1節で「反対」という概念の性質に関して議論し、3.2節で反対と否定との関係および両者が関係づけられる根拠を検討する。3.3節では the opposite の意味論に関して関連性理論に基づく提案を行う。

3.1 「反対」とは何か？

反対関係が成立する必要条件は2つの要素が存在しなければならないことである。例えば、(9)は要素が1つしかないために容認されない。しかし、(10)は文脈からもう1つの要素が特定されるので容認される。また、(11)のように主語が複数の場合、主語は2つの要素から構成される。

(9) *My view is opposite.

(10) I respect that your opinion is different from mine. I am attempting to explain why my view is opposite.

(11) a. Their views are completely opposite.

b. One of their views is completely opposite to the other (of their views).

ただし、単に2つの要素があるだけでは反対関係は成立しない。例えば、2つの見解AとBがあるとき、そこに反対関係があることは必ずしも保証されない。それが保証されるためには、見解の内容に対する賛成・反対という態度などのある点における方向性の違いが必要となる。つまり、ある点（側面など）における方向性の認識の違いが反対関係を保証する。

簡潔にまとめると、「反対」とは二項対立性のことである。つまり、2つの要素とそれらの間のある点における方向性の違いから成る概念である。

3.2 反対と否定の関係

Saito (1972) や Kageyama (1975) では、opposite の意味を否定と結びつけて捉えてきた。本稿でもこれに同意する立場を採る。では、なぜ opposite の意味が否定と関係づけられるのだろうか。

ここでは、3種類の反対関係と見なされる2つの要素間の関係について考えたい。1つは、2つの要素が反意の関係にある場合である。この場合

2つの要素が依拠するスケールがある。例えば long-short は length というスケールが前提となる。この場合、反意関係やそれが依拠するスケールは概念的に決定されている。第2に、「する-しない」という関係である。これは all-or-none の関係である。この関係は概念的に決定されるのではなく、論理的に派生される。3つ目は、ベクトル関係に関わる場合である。例えば、John hit Mary. という文では、ジョンからメアリーへというベクトルがある。このとき、メアリーからジョンへのベクトルは反対と見なされる。この関係は発話によって表される命題内容に基づくものである。

この3種類の関係は以下の表にまとめられる。

Table 2: Types of opposite relation

types of relation	(i) contra (dicto)ry	(ii) 'all-or-none'	(iii) vectorial
base of oppositeness	concept-based	logically derived	proposition-based

ここで注意しなくてはならないのは、the opposite is true を解釈する際に2つの要素のうちの1つしか明示されないという点である。「反対」の内容を理解するための基となる命題があり、それだけが明示されているということである。別の捉え方をすると、明示された基となる命題というインプットが opposite という関数を通して、反対解釈というアウトプットとして得られるということである。この関数的理解に否定が関わる。

表2の3つのタイプにはすべて否定が含まれている。(i)の反意関係は典型である。例えば dead-alive のような相互排他的な関係では not dead は alive を、not alive は dead を意味する。また long-short のような程度のあるタイプでは、not long が short を必ず表す訳ではないが、short は not long の一部と見なすことはできる。このように緩く捉えるなら、反意関係には否定が関わると言える。関係(ii)は、否定が内在したタイプであるの言うまでもない。(iii)のベクトル関係の向きは否定の対象となる。Mary

didn't hit John but was hit by John. で not が否定しているのは、メアリーからジョンというベクトルの向きである。

いずれの場合も、反対という概念は否定と関係づけられる。よって、1つの要素しか明示されていない場合、これを否定した内容がもう一方の要素に対応すると想定するのは当然の帰結であろう²⁾。

3.3 (the) opposite のコード化された意味

これまでの議論から、opposite のコード化された意味を次のように仮定する。

(12) OPPOSITE (x) (x: proposition)^{3),4)}

(12)は「(ある命題に対する) 反対」という、満たされるべきスロットを持つという意味で不完全な概念を表す。この概念はスロットが満たされてはじめて反対の内容が理解される。すなわち、ある命題でスロットが満たされることで解釈が生じるという点で opposite の解釈は関数的に行われる。この関数的性質は否定の解釈プロセスと類似している。

Carston (2002) では、not は意味論的にスコープを最も広く取り、語用論的にそのスコープが狭められると分析している。これを関数として捉えようと、まず命題全体がインプットされ、次にその命題のどの要素が否定されるかが言わば関数的に決定され、その解釈がアウトプットして産出されることになる。

opposite の解釈では、まず「反対」の理解の基となる命題がインプットされ、次にその命題のどの要素が反対になるか（つまり否定されるか）が opposite 関数で決定され、その結果が解釈としてアウトプットされることになる。下の (13B) は (14) に示されるように 2 通りに解釈されうる。

- (13) A: Bill saw that Father was indeed wrong.
 B: The opposite was true. (Adapted from Kageyama 1975)
- (14) a. Bill didn't see that Father was wrong.
 b. Bill saw that Father was indeed right.

(13B)の場合、反対の理解の基となる命題、つまりスロットを満たす命題として(13A)を取る。そして saw を反対のスコープとして取った解釈が(14a)であり、wrong を反対のスコープとして取った解釈が(14b)である。このように、opposite の解釈で語用論的に解決されなければならないのは、①スロットがどの命題で埋められるのか、②その命題のどの要素をスコープとして取るのか、という2点である。次節では、この2点に関する分析を関連性の程度を決める処理労力と認知効果の観点から行う。

4. (*the*) *opposite* の語用論

はじめに、関連性理論について概観しておく。関連性理論とは、あるコンテキストで伝達意図が明示的な発話がどのように解釈されるのかについて説明を与える理論である。発話解釈は関連性の原理に従うと考えている。

(15) Communicative Principle of Relevance

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

(Sperber and Wilson 1995: 260)

(16) Presumption of optimal relevance (revised)

- (i) The ostensive stimulus is relevant for it to be worth the addressee's effort to process it.
- (ii) The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.

(ibid. 270)

意図明示的な行為である発話は、それ自体に最適の関連性があるはずだということを伝達するものと見なされる。そして関連性という概念は処理労力と認知効果の観点から捉えられる。処理労力とは発話の処理にかかる労力のことであり、認知効果とは既存の想定を強化したり、改訂したり、あるいは発話と併せて推論することで新たな想定（推意）を導出したりすることである。よって、処理労力が小さければ小さいほど関連性は大きく、認知効果が大きければ大きいほど関連性は大きくなる。

(12)で示した opposite のコード化された意味 OPPOSITE (x) は、意味論的に確定される内容を表しているにすぎない。しかし意味論的には不十分にしかな確定されていない。その確定度不十分さは語用論的に解決される。opposite の理解で語用論的に決定されるのは、第1に OPPOSITE のスロットがどの命題で満たされるのか、第2にスロットを満たす命題のどの要素が反対となるのか、である。

スロットを埋める命題とは、反対の理解の基となる命題である。この命題が明示されている場合、(17)、(18)に示す通り、その生起位置は opposite の前方でも後方でもよい (McCawley 1972)。

(17) We pretend to recognize that John hits Mary although *the opposite is true*.

(18) Although *the opposite is true*, we pretend to recognize that John hits Mary.

(17)、(18)では虚飾世界と現実世界とのコントラストがある。2.2節で述べたように、譲歩がコントラストを含む非対称的な関係を表すことから、命題 we pretend to ... はコントラストを成す要素の片方である。よって、虚

飾世界内の記述である John hits Mary は関連性が大きく、opposite に先行しても後続してもよい。

コンテキストからスロットを埋める命題を取り出すことが可能な場合、その命題は必ずしも言語化されている必要はない。

(19) [A and B watch Tom beating his little, Bill.]

A (to B): The opposite is usually true.

(19)ではAの発話に先行する発話はない。しかしAとBの目の前で起きている事態から、トムがビルを殴っているという想定は容易に取り出される。そして the opposite is (usually) true はコンテキストから取り出された想定を基に「ビルがトムを殴っている」のように解釈される。このような想定は、話し手と聞き手ともに容易にアクセス可能という意味で相互に顕在的 (mutually manifest) であり、それは十分関連性がある。

最後に、スロットを埋める命題は言語表現で決定されるとは限らない。

(20) a. John tried to answer the questions in this text, but *the opposite was true* in that text.

b. ..., but John didn't try to answer the question in that text.

(21) a. John managed to answer the questions in this text, but *the opposite was true* in that text.

b. ..., but John couldn't answer the question in that text.

(20a)では John tried ... という命題でスロットが埋められ、(20b)のように解釈される。一方(21a)の解釈が(21b)の場合、スロットを満たす命題は John answered ... である。では、なぜスロットを満たす命題は異なるのだろうか。(20a)と(21a)では生じる含意 (entailment) が異なる。(20a)では「答えられなかった」という含意が、(21a)では「答えられた」という含意

が生じる。ただし含意の性質は異なる (Karttunen 1971)。manage の場合、肯定文が真であればその補部も真であり、否定文が真であれば補部の否定が真である。よって、この含意は主節動詞の極性に影響を受ける点で聞き手にとって重要で関連性がある。一方 try の場合、文が否定されても含意までは否定されない。結局、try したかどうか聞き手にとって重要で関連性がある。それぞれの動詞の関連性のある想定の違いがスロットを埋める命題の差異を産み出す要因となる。ゆえに、スロットを埋める命題は関連性の原理に従って決まると説明される。

第2の語用論的に解決されるべき問題について、スロットを満たす命題内の反対にされる要素の論理的可能性は表2に示した反対関係(i)-(iii)と関係する。(i)の反意関係は語に当てはまる。下の(22B)が(23b)のように解釈される場合がそうである。この解釈は、(22A)の命題でスロットが満たされ、その命題内の wrong が反対のスコープとして取られることで導き出される。

(22) A: Bill saw that Father was indeed wrong. (= (13))

B: The opposite was true.

(23) a. Bill didn't see that Father was wrong. (= (14))

b. Bill saw that Father was indeed right.

(ii)の all-or-none 関係は肯定-否定の関係に対応する。よって、反対にされるのは命題全体である。例えば、(22B)が(23a)のように解釈される場合である。この解釈は、(22A)の命題がスロットを埋め、その命題全体が反対のスコープとして取られることで生じる。

(iii)の関係は述語によってベクトル関係が決められるので、反対になるのは命題内の述語によって関係付けられた2つの要素である。

(24) Tom hit Mary; I believe the opposite was true.

(24)でスロットを満たす命題は Tom hit Mary で、the opposite is true は Mary hit Tom と解釈される。このとき、反対のスコープとして取られるのはベクトルを指定する述語である。

(i)-(iii)の関係と反対のスコープの関係は以下のようにまとめられる。

- (25) (i) contra (dicto)ry relation: scope = word
 (ii) 'all-or-none' relation: scope = proposition
 (iii) vectorial relation: scope = predicate

では、あるコンテキストにおいて、この論理的可能性の中からどのようにして1つが選ばれるのだろうか。まず認知効果の観点から見ていこう。確かに(22B)は2通りに解釈可能だが、あるコンテキストではどちらか一方に解釈される。Bがビルが愚かであることを信じ続けているというコンテキストでは、ビルが父親の間違いに気づいたかどうかの問題となる。このとき、(23a)のように解釈されるのは、ビルを疎んじているというBの既存想定をより強くし、さらにAにビルは愚かだからあまり信用しない方がいいという推意を伝達しているかもしれないからである。この場合、認知効果の点において(23a)の解釈の方が関連性が大きい。あるいは、父親の言っていることをビルがどのように考えているかというコンテキストにおいて、ビルは冷静に物事の判断ができるという想定が相互に顕在的であれば、(23b)のように解釈される。なぜなら、(23b)の解釈はビルに関する既存想定(例えば、ビルは冷静に物事の判断ができる)を強くし、さらにビルの意見は聞くに値するからビルに相談すべきだなどの推意が伝達されるかもしれないからである。このコンテキストの場合には(23b)の方が関連性が大きい。このように、生じる認知効果の違いが、解釈の決定を動機づけ

ると言える。

では、関連性を決めるもう1つの要因である処理労力についてはどうだろうか。(23a)の解釈でも(23b)の解釈でもスロットは同じ命題で満たされている。同じ命題を処理する場合、その労力に差はない。つまり2つの解釈の処理労力に有意な差はない。ゆえに、上で見たように、それぞれの解釈、つまりスコープの決定は認知効果の観点から特定される。このことから、スコープの決定も関連性の原理に従って解釈されていると説明される。

簡潔にまとめると、スロットに埋められるべき命題の選択、およびスコープとして取られるべき命題内のある要素の選択に関して、語用論的に、つまり関連性の原理に従って決定されると結論づけられる。

5. 結語

本稿では the opposite is true について、最初にその統語的・意味的特徴を観察した。統語的な特徴はこの表現が節であることに動機づけられることを見た。さらにこの表現が生起する環境はコントラストの生成という意味的特徴を産み出すことが明らかとなった。

次に、opposite のコード化された意味を OPPOSITE (x) と仮定し、その妥当性の検証を試みた。opposite はスロットを持つという点で意味論的確定度は不十分である。しかしスロットを満たす命題が何であるか、その命題のどの要素が反対のスコープとして取られるのか、という2つの語用論的に解決されるべき問題に関しては、語用論的に、つまり関連性の原理に従って決定されると説明されることが明らかとなった。

注

- 1) Our intuition about *the opposite* says that the item has something to do with 'negation'. (Kageyama 1975 : 112)
- 2) opposite は not と少なくとも次の2つの点で同義ではない。第1に、

not は韻律 (prosody) の影響を受けるが opposite は受けない。第 2 に、not が持つような論理性を opposite は持たない。詳細は 3.3 節を参照。

3) 小型大文字は概念を表す。

4) スロット x を命題と指定しているのは、true かどうか判断されうるのは命題であるため、(the) opposite によって表される内容が命題として表される必要があるからである。

参考文献

- Blakemore, D. and R. Carston (2005) "The Pragmatics of Sentential Coordination with *And*," *Lingua* 115(4), 569-589.
- Carston, R. (1998) "The Semantics/Pragmatics Distinction: A View from Relevance Theory," *UCL Working Papers in Linguistics* 10, 53-80.
- Carston, R. (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell, Oxford.
- Cruse, A. (2004) *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics, 2nd Edition*, Oxford University Press, Oxford.
- Kageyama, T. (1975) "How to Get *the Opposite*," *Studies in English Linguistics* 3, 110-138.
- Karttunen, L. (1971) "Implicative Verbs," *Language* 47(2), 340-358.
- McCawley, J. (1972) "Interview with Dr. McCawley (2)," *Eigo Kyoiku* 21(9), 24-29.
- Saito, S. (1972) "On the Semantic Interpretation of *the Opposite*," *Studies in English Linguistics* 1, 13-21.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986/1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- Wilson, D. and D. Sperber (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.

(大学院後期課程学生)

SUMMARY

A Study of the Interpretation of *the Opposite is True*

Naohiko KUROKAWA

The aim of this paper is to observe the behaviour of *the opposite is true*, and to make a relevance-theoretic analysis of what the encoded meaning of *opposite* in *the opposite is true* is and how *the opposite is true* is interpreted.

There are some syntactic characteristics in *the opposite is true*. First, this expression is often conjoined with another conjunct by the coordinate conjunction *but*. Second, it is frequently connected with another clause by such subordinate conjunctions as *although* and *while*. Third, it can be embedded into the complement of the main verb. Fourth, it tends to be modified with such other elements as prepositional phrases or adverbials, which provide some contrast to a certain element in the underlying proposition needed to understand *the opposite is true*.

These syntactic characteristics are all associated with the semantic feature of "contrast". In other words, they necessarily bring about some contrast between the proposition expressed by *the opposite* and the proposition underlying for *the opposite*.

I propose that the encoded meaning of *opposite* is OPPOSITE (x), which is a semantically underdeterminate concept in the sense that it contains a slot (x) to be saturated. Following Saito (1972) and Kageyama (1975), I take the notion of oppositeness to be potentially associated with the negation. Just as Carston (2002) claims that *not* semantically takes its target as the wide scope and the scope is pragmatically narrowed, I contend that *the opposite* semantically takes a proposition as an input to the slot (x) and that what proposition is inputted and what element in it is negated (i.e. interpreted in the opposite meaning) are pragmatically determined. In other words, *the opposite is true* is interpreted pragmatically, that is, in consistency with the Principle of Relevance (Sperber and Wilson 1995).

キーワード：反対，コントラスト，否定，関連性の原理